Print ISSN 2424-0249
Online ISSN 2433-6688

森下財団紀要

Journal of Morisita Memorial Research

〈第 3 号〉
2018 年 3 月

【森下財団紀要第 3 号発行に寄せて】

森下財団紀要第 3 号の発行にあたりご挨拶
丸山　政行（一般財団法人京都大学名誉教授森下正明研究記念財団　代表理事）

小野勇一先生の思い出
山根　明弘（西南学院大学人間社会学部　准教授）

【　論　　文　】

ウエルネス観光まちづくりにおけるウエルネス滞在リゾート活用に関する一考察
―フフ山梨の事例から―
森田　浩司（大阪観光大学観光学部 准教授）

【 研究ノート 】

A Place to Long For: The Representation of Paris in Hollywood Films
Karen Nishioka
(Graduate School of Human and Environmental Studies, Kyoto University)

【　資　　料　】京都大学農学研究科　博士学位論文　要旨

コミュニティ・ビジネスの創出から発展のプロセスに関する研究
―農村地域活性化への効果を焦点にして―
小林　康志（特定非営利保活動法人スタイルワイナリー代表理事）

一般財団法人　京都大学名誉教授森下正明研究記念財団
Morisita Memorial & Research Foundation

森下財団紀要
Journal of Morisita Memorial Research

第 3 号　2018 年

【森下財団紀要第 3 号発行に寄せて】

3　一般財団法人京都大学名誉教授
　森下正明研究記念財団研究紀要第 3 号の発行にあたりご挨拶
丸山　政行（一般財団法人京都大学名誉教授森下正明研究記念財団　代表理事）

5　小野勇一先生の思い出
山根　明弘（西南学院大学人間社会学部　准教授）

【　論　　文　】

10　ウエルネス観光まちづくりにおけるウエルネス滞在リゾート活用に関する一考察
　―フフ山梨の事例から―
森田　浩司（大阪観光大学観光学部 准教授）

【 研究ノート 】

25　A Place to Long For: The Representation of Paris in Hollywood Films
Karen Nishioka
（Graduate School of Human and Environmental Studies, Kyoto University）

【　資　　料　】京都大学農学研究科　博士学位論文　要旨

35　コミュニティ・ビジネスの創出から発展のプロセスに関する研究
　―農村地域活性化への効果を焦点にして―
小林　康志（特定非営利保活動法人スタイルワイナリー代表理事）

一般財団法人　京都大学名誉教授森下正明研究記念財団
Morisita Memorial & Research Foundation

一般財団法人京都大学名誉教授
森下正明研究記念財団研究紀要第３号の発行にあたりご挨拶

一般財団法人京都大学名誉教授
森下正明研究記念財団
代表理事　丸山政行

森下正明財団紀要第３号の研究紀要の発行にあたり，ご投稿いただいた方々，また審査・編集をご担当いただいた方々に深く御礼を申し上げます。

森下正明の研究分野が個体群生態学でしたが，この研究紀要はツーリズムを主題としています。私も財団員は世界に発信したいのは，森下正明の研究精神です。当紀要第１号でもご紹介いたしましたが，森下正明は当時 65 歳で，1978 年 12 月に刊行された森下正明生態学論集（第一巻）で，次のことばを残しています。「すでに日は暮れかけているのに私の歩かなければならない道の先は，まだまだはるか彼方にかすんでいる。今から果してどこまで辿れるか判らないけれども，足もとの明るいうちはせめて１歩でも２歩でも前へ進むことをやめずにいたいと考えているのである。それは学生時代の私に科学精神の何たるかをしらずしらずの間に教えて下さったその頃の指導教授の湯浅八郎先生や，未熟の私を常に温く導き心の支えにもなって頂いた今西錦司博士をはじめ多くの先輩友人の方々の御厚意にこたえるための，私にできるただ一つの生き方だからである」（全文は下記 URL からご覧いただけます）一般のサラリーマンの停年が 55 歳の時代であった時代，また九州大学，京都大学時代，現在でも使われている，Iδ 指数という大きな業績を残しても，それに甘んずることなく，また京都大学を 63 歳で停年を迎えても，さらに研究を続け，当財団の最高顧問である故・小野勇一先生の助言を得ながら 81 歳の時に英国の学会に投稿，Distinguished Statistical Ecologist Award 国際生態学会賞を受賞しました。その詳細は当財団のホームページに小野先生の「森下正明先生との思いで」として掲載しておりますのでぜひ，一度ご覧いただければ幸いです。

私たち森下正明研究記念財団は，森下正明の研究精神を引き続ぎ，この研究紀要が、観光学，経営学分野において世界に向けて大きく発信できるよう，努力したいと考えています。皆様方の変わらぬご支援を賜りますようお願い申し上げます。

一般財団法人
京都大学名誉教授森下正明研究記念財団

代表理事　　丸山政行　博士（経済学）

参考ホームページ
http://www.morisita.or.jp/mes.html　森下正明生態学論集（第一巻）
http://www.morisita.or.jp/message/ono.html　小野勇一先生「森下正明先生との思いで」

Kyoto University Professor Emeritus Foundation
A Message upon the publication of the 3rd issue of the Masaaki Morisita Research Memorial & Foundation Journal

With the publication of the 3rd issue of the Masaaki Morisita Research Memorial & Foundation Journal, we would like to express our gratitude to all those who published, researched and edited.

Although Masaaki Morisita's field of research was population ecology, this journal is instead focused on tourism. We at the foundation would like to spread to the world the spirit of Masaaki Morisita's research. In the first issue of this journal, we mentioned that Masaaki Morisita was 65 when, in the December issue of the 1978 essays on population ecology, he said the following: "Although the days are coming to a close, the road I must walk is still shrouded in a haze. I don't know which direction I will go from here, but I would like to continue taking one step at a time. This is a lesson I learned, even when I didn't know what I wanted to study, when mentors and professors like Hachiro Yuasa and Kinji Imanishi passionately taught and supported me." (The full text is linked below.)

It was a time when the retirement age of business men was 55, and Professor Morisita was at Kyushu University and Kyoto University. This is when Professor Morisita developed Morisita's Overlap Index, which is still in use today. And despite reaching Kyoto University's retirement age of 63, he continued with his research. While receiving advice from this foundation's distinguished advisor Yuichi Ono, Professor Morisita was awarded the Distinguished Statistical Ecologist Award. The details of this can be found in Professor's Ono's essay "Remembering Professor Masaaki Morisita," available on this foundation's homepage.

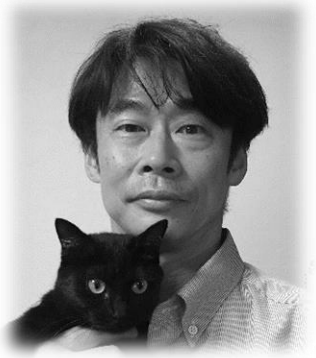
We at the Masaaki Morisita Research Memorial & Foundation would like to continue the spirit of Professor Morisita's research. With this research journal, we would like to disseminate that spirit to the world in the fields of tourism and management services. We appreciate everyone's continued support.

Kyoto University Professor Emeritus Masaaki Morisita Research Memorial & Foundation

Director
Masayuki Maruyama, PhD, Economics

References
http://www.morisita.or.jp/mes.html Masaaki Morisita's Essays on Population Ecology, Vol. 1
http://www.morisita.or.jp/message/ono.html Prof. Yuichi Ono, "Remembering Masaaki Morisita"

小野勇一先生の思い出



西南学院大学　山根　明弘

2015 年 7 月 20 日に森下正明先生の弟子である小野勇一先生はご逝去された。私は 1988 年、九州大学理学部３年の後半に小野研（生態学研究室）に配属され、1994 年に小野先生が退官されるまで研究室でご指導頂いていた。私は小野先生から学位を頂いた最後の大学院生でもある。また、退官されたのちに北九州市の博物館で館長をされていた 2002 年から 2010 年までの間、私は小野館長のもとで学芸員として勤務していた。

森下先生の孫弟子筋にあたる私が実際に森下先生にお会いしたのは、実はたった一回だけである。1990 年 3 月の小野先生の還暦パーティに京都からおいでになった森下先生をご紹介いただき、短い自己紹介をさせていただいたのが、最初で最後の森下先生との会話となった。私は森下先生との接点が全くないのと同然である。しかし、森下先生を師と仰ぎ、心から慕っておられた小野先生のなかに、森下先生の現役時のお姿が見え隠れするのである。なぜ私がそう思うかといえば、ランチ後のひとときに、小野先生が珈琲とともに煙草を燻らせながら楽しそうにお話される森下先生との思い出ばなし、特にそのなかで語られる研究に対する森下先生の姿勢や学生指導のお姿は、まさに小野先生そのものだったからである。

ここに、小野先生との思い出を綴らせていただこうと思う。私の脈略のない拙い文章で小野先生との思い出を語ることは、先生にとっても甚だ迷惑なことだとは承知している。しかし、たとえ私的で偏った見方であれ、小野先生のお言葉をできる限り記録として書き残すことは、戦中戦後の時代を駆け抜けた生態学者の素の姿と、森下イズムを後世に伝えることになる。おそらく小野先生も草葉の陰から「おい山根、書いてみろ」と言ってくださっているようにも思う。なお、小野勇一先生の生態学研究の業績に関しては、同じ小野研究室の先輩である江口和洋先生(2015)や岩本俊孝先生(2015)がすでに書かれているので、ここでは九州大学生態学研究室を中心とした日常的な出来事とその思い出について書こうと思う。

学部３年生の後期から小野研のメンバーとなったが、学部を卒業するまでは小野先生から研究指導をいただいた覚えはない。そもそも、４年生の卒論には一切関わっておられなかったように思う。当時の卒論というものは、研究室の准教授や助手の先生や、当時たくさん在籍していたオーバードクターの先輩たちが提案したいくつかのテーマのなかから、４年生が好きなものを選び、就職活動あるいは大学院への受験勉強の合間に行うものであった。私は、アゼネズミという東南アジアに分布するネズミの行動解析を卒論のテーマとしていた。たとえ大学院への進学を志望し、将来研究者を目指す学生であっても、卒論などはとても研究とは言いがたい一種のトレーニングのようなもの、というのが当時の小野研究室での卒論の位置づけだったのであろう。

大学院入試にパスして、進学してはじめて小野先生は、私を駆け出しの研究者として認めていただいたように思う。大学院では島に生息するノラネコの繁殖生態学を研究することにしたのだが、研究を始めるにあたってまず何から取り掛かれば良いものかと迷っていた。そのような時期のある日、小野先生は私の顔をみるなり「おい山根、来週相島に行くから船の時間を調べておけ」と、突然言い渡された。これまでまともに小野先生とはお話ししたことなどなく、その小野先生と二人で島に行くなど、畏れ多いのと同時に、何かヘマをやらかして怒られるのではないかと不安でもあった。翌週、小野先生と私を乗せた渡船が相島に到着すると、小野先生は「そこの酒屋で酒を２本買って、紐で結わえてもらってこい。焼酎ではなくて、日本酒をな」と言ってお金を私に手渡した。そして、島の人に区長さんのお宅の場所を聞いて、全くアポなしで日本酒を手土産に挨拶へと伺った。区長さん宅では、自分の学生が今後お世話になること、島の寄り合いでもそのことをみんなに話してもらいたいこと、そしてどこかに空き家があれば使わせてもらいたいこと等、相島で調査を始めるにあたって私が必要であることを全て小野先生が短い時間の間に話をつけてくださった。その後、相島の猫を二人で観察しながら、猫の生態や社会についてお話していただいた。その時の小野先生の表情はとても楽しそうで、そしてとても優しかった。研究室での、ともすると学生を寄せ付けないような雰囲気とは全く違う小野先生に驚きながら、フィールドで初めてのご指導をいただいた。

そのおかげで、相島での猫調査を無事に開始することができた。私は子供の頃からあこがれていた本格的な動物の生態学的研究できるのが嬉しくて、真っ黒に日焼けしながらノラネコの観察を続けていた。その年の夏、小野先生は胆石摘出手術のため、入院された。手術後、研究室のメンバーと一緒に病院へお見舞いに行った。みんなが小野先生のベッドを取り囲むなか、私は後ろの方で隠れるように小野先生と先輩たちのお話を聞いていたが、小野先生は私の姿を見つけるなり「おい、そこの陽に焼けた男、ネコの調査は順調か？」と声をかけていただいた。びっくりして「はい」と答えると、小野先生はとても優しそうに笑っておられた。 小野先生の学生指導の方針は、手取り足取り口やかましく指導するのではなく、言ってしまえば、ほぼ完全放任主義だったように思う。ただ放任主義といっても、学生が研究を進める過程で、ここぞという時には手を貸すが、それ以外は自分の好きなようにやれ、といった学生の自主性を最大限に尊重した指導方法だったと思う。そのことを物語るエピソードとしては、次のような思い出がある。相島のノラネコの研究では、生まれてきた子ネコの父親がどのオスネコであるかが、重要なポイントであった。しかし、これはオスの交尾を観察するだけでは不十分で、遺伝子を使った解析がどうしも必要であった。今でこそ、DNA を使った父子判定は動物生態学の分野では当たり前の解析ではあるが、当時はまさに開発されたばかりの新しい技術であった。また、当時の動物生態学者の意識としては、自分の研究対象としている動物を野外でどれだけ追跡できるかが最も大事であり、室内での実験などに没頭するのは邪道で、DNA 解析などもってのほか、といった風潮があった。また、DNA 解析には従来の生態学では考えられないような高価な実験機材や試薬が必要とされた。そのようななか、小野先生にノラネコの DNA 解析をやらせてくださいと頼み込むと「お前にその覚悟があるのか？」とまず尋ねられた。私が本気であることがわかるとすぐさま、DNA を使った父子判定では当時の第一人者であった京都大学霊長類研究所の竹中修先生にその場でお電話をかけられ、私が竹中先生のラボで DNA 解析の技術指導を受けられるようにお願いしてくださっ

た。あとで知ったことだが、小野先生は竹中先生とほとんど面識がなかったようである。小野先生のこの即決力と行動力は、私が当時の小野先生の年齢に達したとしても、全く真似することができないと思う。結局、霊長類研究所がある愛知県の犬山市に長期間滞在する必要があり、その間は相島でのフィールドワークができないという理由から、竹中先生のもとでの DNA 解析修行計画は実現しなかった。しかしその後、小野研究室の隣の集団遺伝学研究室で、私が DNA 解析ができるように、小野先生と助手の土肥昭夫先生が頼みに行ってくださった。

他にも小野先生の指導方針を物語る次のような思い出がある。修士課程の頃には、DNA を使った親子判定が相島のノラネコでも実施が可能であることがわかり、まだデータ数がまだ少ないながらも、父子判定の結果も少しずつ出始めていた。博士課程に進学してしばらく経った頃、これまでの結果を京都の国際学会のシンポジウムで発表してもらえないかという依頼が舞い込んだ。国内学会でさえ、数回発表した程度でしかない私が、まだ研究途中である結果を、しかも通訳なしの国際学会で発表するのは、あまりにも荷が重かった。しかし、せっかく頂いたチャンスでもあるし、小野先生をはじめサポート頂いている研究室の先生方の恩にも報いたいという気持ちもあったので、引き受けることにした。それから発表までの数ヶ月、図表作りや発表原稿の作成などに頭を抱える毎日であった。発表のため京都に旅立つ前日、小野先生が「今からお前の発表を聞いてやるから、部屋にいるメンバーを全員呼んでこい」との命令が下った。小野先生をはじめ多くの先輩方が見守るなか、研究室で発表のリハーサルを行った。小野先生は腕組みをしながら睨みつけるように私の発表をじっと聞いてくださった。私自身は下手くそな英語で、内容にもそれほど自信があったわけではない。小野先生にダメ出しされたらどうしよう、などと不安な気持ちのなか発表を終えた。ところが小野先生からは「よし、よく出来とる。褒めてやるぞ。頑張ってこい」との思わぬ言葉をいただいた。小野先生にこんなに褒められたのは、後にも先にもこの１回だけだった。おそらく私の発表など、英語だけでなく内容についても、小野先生には聞くに堪えないものだったと思う。しかし、小野先生は「今のアイツに必要なのは、自信をつけてやることだ」というお気持ちから、私を過分に褒めてくださったのだと思う。その時は小野先生の本意はわからなかったが、まがりにも学生を指導する立場となった今の私には、その時の先生の優しいお気持ちがとてもよくわかる。

小野先生は煙草がとてもお好きで、教授室でもサロンと呼ばれていた研究室の居間のような部屋でも、いつも煙草をふかされていた。当時の研究室では、教員も学生も喫煙率が高く、半数以上がスモーカーだったと思う。まだ分煙などといった意識は全くないような時代で、それぞれの研究室でも廊下でも喫煙者である私たちは普通に煙草をふかしていた。その頃、外国製の煙草は国産のものよりも値段が高く、学生は国産タバコを吸っていたが、小野先生はマルボロや 555（スリーファイブ）などの洋モクを吸っておられた。教授室とサロンはつながっており、その間のドアは小野先生が不在の時も鍵が閉められることはなかった。夜になって煙草を切らした学生たちは、教授室に忍び込んで小野先生の机に無造作に置いてあるマルボロのボックスから２、３本煙草を失敬していた。サロンで学生たちの酒盛りがあった翌朝などは、小野先生の煙草をほとんど吸ってしまうこともあったが、しかし翌日には必ずまた新しいマルボロのボックスが置いてあった。小野先生は、夜に学生たちが自分の部屋に入ってきていることも、また煙草を持ち出していたこともすべてお見通しで、むしろそれを喜んでおられたのではないかと思う。教授室には重要書類等がたくさん置かれていたと思う。それでも部屋に鍵をかけずに、学

生の出入りを自由に許していたのは、まだおおらかな時代といったこともあるが、小野先生は学生たちを信頼していたからだと思う。喫茶店で珈琲をご一緒する時など、自分の煙草に火をつけられた後、ぽーんと私たちの前にマルボロの箱を投げられて、私たちが恐縮して１本いただいて煙草に火をつけると、大変嬉しそうな顔をされた。そして、よくこうやって森下先生と喫茶店で珈琲を頂いたお話をよくされていた。小野先生が学生だった戦後動乱の時代は、煙草や珈琲などは学生にはとても手に届かい贅沢品であっただろう。それを学生の時代に森下先生によくご馳走になり、今度は自分の学生たちに同じことをして下さっていたのだと思う。

同様に食べ物に関しても、小野先生はわたしたちによくご馳走してくださった。小野先生は奥様手作りのお弁当をよく持ってこられていたが、そうではない時には、サロンでたむろしている学生たちに「おい、欠食児はおらんか？」と大声で声をかけられ、まだ昼食をとっていない学生を自分の車に乗せてランチに連れて行ってくださった。ラーメン屋、喫茶店、ファミリーレストランでランチをご馳走になることが多かった。ファミリーレストランなどでは、遠慮して値段の安い日替わりランチなどを注文しようとすると、小野先生はメニューの写真を見て「山根はこの肉がたくさん入っているのを注文しなさい」と、高いメニューを選んでくれるのである。また、ラーメン屋でも同様に「わしはもうあんり肉は食えんが、お前はチャーシュウ麺を食べろ」と自分よりも高いメニューを選ぶように言ってくださるのである。また小野先生のご自宅でもよくご馳走していただいた。修士課程の頃だと思うが、小野先生のご自宅の庭作りの手伝いに朝から呼ばれたことがあった。古賀市薬王寺にある小野先生のご自宅に到着すると、小野先生は作業着姿ですでに作業を開始されていた。その姿は、一般人の目からは大学の偉い先生にはとても見えないような、どこから見ても農家のおじさんといった格好だった。庭づくり作業といっても花壇をつくるといったような生易しいものではなく、土を１メートル近くも掘り返して、大きな土管を埋め込んだり、大きな庭石をロープに縛りつけ、二人でかついだりもした。先生は還暦直前にも関わらず、私よりも元気で力があった。「こういう作業はな、腕力ではなく、腰が大事なんじゃよ」とタオルで汗をぬぐいながら笑顔で話されていた。昼が近づくと、「昼飯に秋刀魚を焼くから、お前も手伝え」と私に七輪の火の起こし方から魚の焼き方まで教えてくださった。昼食は小野先生と奥様と３人で風通しの良い離れの２階でご馳走になったが、まるで家族の一員かのようにお二人には接していただいた。午後も作業が続き夕方が近づいてきた頃、「晩飯はすき焼きにするから、山根も食べていきいなさい、それと〇〇ちゃんも来るように電話しなさい」と先生はおっしゃった。〇〇ちゃんとは、そのころ小野研究室の事務職員で、私と付き合っていた（現在の私の妻でもあるのだが）。小野先生はそのことをすでにご存知だったようで、その後も何かと二人のことを気遣ってくださった。結婚式の仲人をお願いに行くと、「悪いがワシは仲人というものはせんようにしておる」と断られたが、結婚式当日、教会から出てきた私たち夫婦に、大喜びでライスシャワーを振りかけてくださった。また、湯布院に新婚旅行に行く私たちに、「ワシの知人が経営している旅館があるので、そこに泊まりなさい。ワシからの新婚祝いじゃ」と言ってくださった。その温泉宿は「玉の湯」という湯布院なのかでは老舗で、高級旅館としても有名である。帰り際に宿の方が間違って私に渡した請求書を見て、その額に驚いてしまった。私たちが常識としている宿代よりも１桁も高い料金だった。小野先生は、私たちを自分の息子や娘のように見てくださっていたのかもしれない。

私は2016年に、念願かなって大学の教員となった。私立の文系大学であるので、いわゆる不夜城の理系大学ではない。ゼミ生を抱えた研究室は持てるものの、学内での泊まり込みや煮炊き、飲酒・喫煙も禁止されているので、残念ながらかつての小野研究室と同じ雰囲気というわけにはいかない。また、文系の大学ということもあって、フィールドワークや実験を基本とした生態学をゼミ生の卒業研究とすることも難しい。大学院に進学する学生もいない。そのような状況のなか、私が小野先生から引きついた森下イズムを、そのまま若い世代に伝えていくのは現在困難である。私ができることといえば、ゼミ生たちを家族同然として面倒を見てやることや、飲み食いに不自由させないことくらいであろうか。あとは、喫茶店で学生と珈琲でも飲みながら、私を育ててくれた小野先生との思い出話をしてみようと思う。

引用文献

江口 和洋 (2015)「小野勇一先生を悼む」、日本生態学会誌 65: 211-212.
岩本 俊孝 (2015)「小野先生の思い出」、日本生態学学会誌 65: 213-215.

【 論　文 】

ウエルネス観光まちづくりにおける ウエルネス滞在リゾート活用に関する一考察

―フフ山梨の事例から―

A study of the town development based on Wellness Tourism by utilizing Holistic Resort and Wellness Resort
—From the perspective of the case of “Fufu Yamanashi″－

森田　浩司*
Koji Morita

【要　旨】

本稿では、ヘルスツーリズムをベースにした観光まちづくりの現在の日本各地における推進事例を調査した。その結果、現行では、日本各地におけるヘルスツーリズムの取り組みの多くが、「湯治滞在」や、「ウォーキング」の取り組みに留まっており、広範なウエルネスプログラムの提供には至っていない現状が明らかになった。その中で多様なウエルネス需要に対応出来ているのが、統合療法をベースとした各種プログラムを複合的に提供することをコンセプト（目的）としたホリスティックリゾートや、複数のウエルネスプログラムを提供している「ウエルネス滞在リゾート」という主に民間の宿泊施設である。この点について、本稿では「フフ山梨」の事例の切り口からの考察を試みた。その結果、こうした「ウエルネス滞在リゾート」と自治体が、ウエルネス観光まちづくりでタイアップして取り組むことで、幅広いウエルネス需要に対応出来るウエルネス観光まちづくりに繋げていける結論を導き出した。

Keywords：ウエルネス、ウエルネスツーリズム、観光まちづくり、
ホリスティックリゾート、ウエルネス滞在リゾート

Ⅰ．はじめに

1．研究の背景

厚生労働省によると、2013 年の日本人の平均寿命は男性が 80.21 歳、女性が 86.61 歳である一方、アメリカワシントン大学の研究チームの調査によると同じ 2013 年の日本の健康寿命（健康上の問題で日常生活が制限されることなく生活できる期間）は、男性が 71.11 歳、女性が 75.56 歳とのことである（日本経済新聞、2015)。これらからわかることは平均寿命と健康寿命との差が 10 歳近く開いているという状況である。つまり、多くの人々にとって、人生終盤の残り 10 年は寝たきりであったり、自らの意思で活動するのに何らかの制約を余儀なくされるなど、必ずしも望ましい状況にない事が示唆される。こうした状況下において、「死ぬ直前まで自分の足で歩いて人生を楽しめるような健康」を望む「健康（寿命）志向」が高まっている。

また、情報化の進展や 24 時間社会の定着、長引く不景気による業績悪化などによるストレス社会化が進行しており[1]、こうしたストレスからの解放やリフレッシュを求める「癒し志向」が近

*大阪観光大学観光学部 准教授 Associate Professor, Faculty of Tourism, Osaka University of Tourism

[1] 伊藤(2000）は、科学技術の進歩が我々に大きな恩恵をもたらす一方、現代社会が我々に様々な心理的・社会的ストレスを与え、それが人々のメンタルヘルスに悪影響を与えている。また社会の情報化により、世界中の情報が昼夜を問わず入ってくる状況になり、こうした状況に対応すべく、企業も次第に 24 時間体制を取るようになり、こうした環境下に於いては、人々は一定の生活リズムを保つのが困難となり、こうした生活リズムの乱れが人々の精神状態にも悪影響を及ぼすことは避けがたいとしている。

年高まってきている。

こうした現在の「健康志向」「癒し志向」の傾向は、日々の生活の中で、テレビや新聞、雑誌の健康をテーマにした番組、記事や、健康食品や健康グッズのコマーシャルは枚挙にいとまがないことから推察可能である。また観光においても、旅行・観光目的に関する各種調査から「健康志向」「癒し志向」の傾向、とりわけ「癒し志向」の高さが見て取れる（Ⅱ章 2 に詳述）。

2. 問題の所在

しかし、こうした需要が必ずしも観光まちづくりの活性化に繋がってこない困難さに直面している現実がある。特に「健康志向」については、観光展開・商品化の難しさが伴う。例えば、日本ヘルスツーリズム推進機構（2017）のヘルスツーリズムの定義（「健康・未病・病気の方、また老人・成人から子供まですべての人々に対し、科学的根拠に基づく健康増進《EBH: Evidence Based Health》を理念に、旅をきっかけに健康増進・維持・回復・疾病予防に寄与するもの」）のように、ヘルスツーリズムにおいては、提供側のエビデンス志向が強い傾向にある。提供者側としては、お客様に提供する以上は、いい加減なものではなくきちんとした医科学的裏付けが求められる責任があるため、エビデンス志向が強まることはやむを得ない部分もある。しかしながら観光客側にしてみれば、西村（2016）も示すとおり、レジャー色や楽しみを求める観光において、エビデンスベースの堅苦しい、拘束時間が長い、融通が利かない、マニアックな取り組みには、楽しみや気晴らしを求める観光客の忌避感が否めず、提供側の意向と客側のニーズとが乖離しており、この点が、ヘルスツーリズムに基づく観光まちづくりの観光展開や商品づくりを困難にする要因の一つと考えられる。

また、エビデンスベースに偏れば偏るほど、例えば病院などの医療施設や医療機器の使用を伴うケースが増えてくる。しかし、診察室や病床、医療施設の利用スペースや検査機関、医療機器、さらに医者や理学療法士、セラピスト、トレーナーなどの人材には上限があり、結果として 1 件あたりの受入観光客数にも、比較的低めの上限を設定せざるを得ない。通常の周遊観光や、同じニューツーリズムのコンテンツツーリズムのように、何台もの観光バスでやって来る観光客を連日受け入れることは困難である。したがってウエルネスツーリズム、ヘルスツーリズムによる観光まちづくりや活性化については、大規模集客による儲けという一攫千金志向より、地域やサービスを気に入って繰り返し訪問してもらうリピーター化志向で以って捉えるべき性質を有している。そのためマスツーリズム的な観光客数増加やそれに伴う大型かつ即効性のある経済効果への期待感を持って、ウエルネスツーリズム、ヘルスツーリズムによる観光まちづくりや活性化を捉えてしまうと、経済的活性化の事前期待にはそぐわない困難さという問題を抱える事となる。

3. 研究の目的と方法

本稿では、こうした前項の問題の改善のため、各地に点在して展開しているウエルネス滞在リゾートの活用が一助として機能するかについて、まずは各地のヘルスツーリズムの取組事例で具体的に提供されている内容から現状の問題点を分析する。その上で、ウエルネス滞在リゾートの1つである「フフ山梨」の事例の視点から、課題解決に向けた方策について考察する。

研究方法については、需要動向については既存の観光統計の、ヘルスツーリズムの取組事例については日本ヘルスツーリズム推進機構等が発表する各々の2次データを基に検証する。またウエルネス滞在リゾートについては、本稿ではウエルネス滞在リゾートの1つである「フフ山梨」を取り上げ、関係者へのヒアリング調査および実地滞在による観察を基に検証を行い、結論を導き出していく。

Ⅱ．観光行動におけるウエルネス需要の現状

1. ウエルネスとウエルネスツーリズム

Sheledon と Bushell (2009) は‘wellness'という言葉は 1959 年に Halbert Dunn が'wellbeing'と'fitness'を統合して作ったのがはじまりとされ、Dunn は 1961 年にウエルネスを「人間として大いに満足した状態」と言及している。そして、GLOBAL WELLNESS INSTITUTE (GWI, 2015) によると、このウエルネスという言葉は 1970 年代に専門用語として使われるようになり、過去 10-15 年の間に急激によく使われるようになった。海外では 2000 年以降のウエルネスツーリズムに係る研究だけでも、ウエルネスの定義に係る先行研究がいくつも見られる[2]。各々微妙に表現や内容は異なるところもあるが、これらの先行研究が定義づける概念において共通しているのは、ウエルネスという概念は「健康の維持・増進を、複合的な観点やそれらとの関連性を踏まえて捉える概念である」ということである。

また日本においては、ウエルネスおよびウエルネスツーリズムの理論研究は少ないが、日本におけるウエルネス研究の第一人者である野崎（1994）は、「ウエルネス」を「自分の人生には自分で責任を持つことを知り、より幸福でより充実した人生を送るために、自分の現在の生活習慣（ライフスタイル）を点検し、自分で変えなければならないことに気づき、これを変革し続けていく過程である」と定義している。以上を勘案し、本稿では「ウエルネス」の定義を、「複合的な視点から総合的に、また自ら積極的に、様々な思考や活動を通じて、健康的な生活習慣を整え、健康で充実した人生を達成・維持・増進していくことを示す概念」と定めることとする。

またウエルネスツーリズムに関しても上述の 2000 年以降のウエルネスツーリズムに係る研究だけでも、いくつもの定義が挙げられている。これらの先行研究の定義において共通しているの

[2] Smith & Puczkó (2014)、GWI (Global Wellness Institute /2015)、Powis と O'Leary (2009)、Erfurt-Cooper & Cooper（2009)、National Wellness Institute (2014)など

は、端的にいうと、上述の「ウエルネスを体現するツーリズム」という事である。逆に見解が異なる部分としては、ウエルネスツーリズムの概念における主な目的や行為部分に medical（医療・治療）要素を含めるか否かという部分である。この詳細の検証は稿を改めてとするが、本稿における定義としては、「治療」に係る「メディカルツーリズム」と「治療以外の健康」に係るツーリズムとしての「ウエルネスツーリズム」は、条件や要素、（地域活性化や事業における）成功の為の方向性も全く異なるものである（GWI、2015）ことから、完全な「治療」目的や行為を第一義とするツーリズムはウエルネスツーリズムに含めないという線引きを行い、「ウエルネスを体現化し、メインとする目的を治療以外に置くツーリズム」を「ウエルネスツーリズム」と定義する。

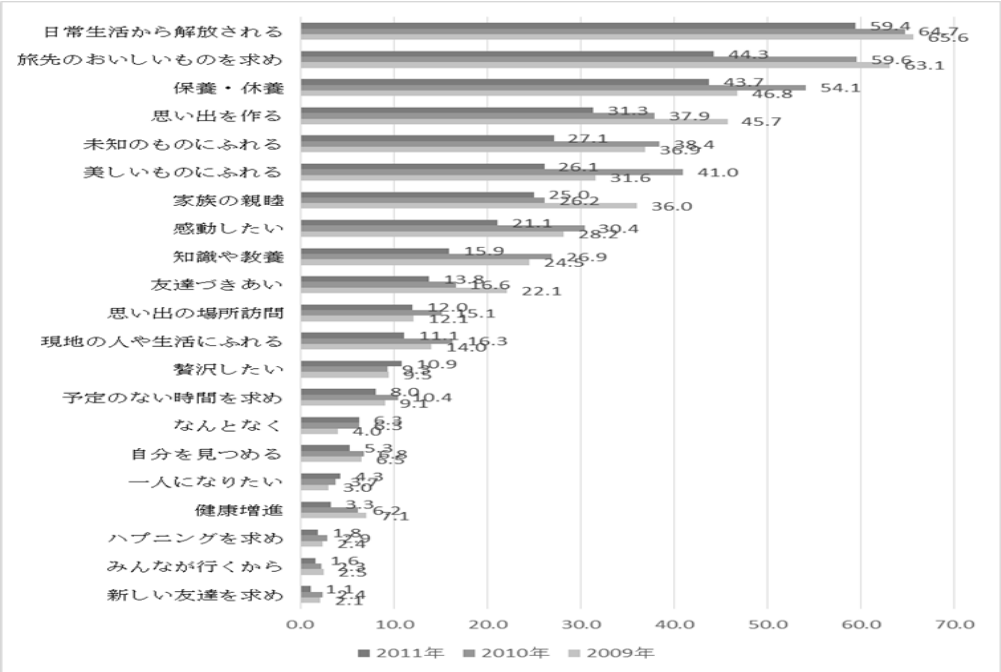
2. 観光行動における「健康」「癒し」の需要

Ⅰ章の１（研究の背景）で述べたように、現在社会の世間一般において、また観光においても、「健康志向」「癒し志向」は高まりを見せている。本節では、旅行・観光目的に関する各種調査から、観光における「健康志向」「癒し志向」の傾向について考察していく。

日本観光振興協会（2017）の調査のうち、「宿泊観光客の旅先での行動について（複数回答）」では、30 項目中、1 位「自然の風景を見る 37.4%」、2 位「温泉浴 30.3%」といった心身の癒しに繋がるウエルネス要素が上位で、各々がおよそ 1/3 を占めている。

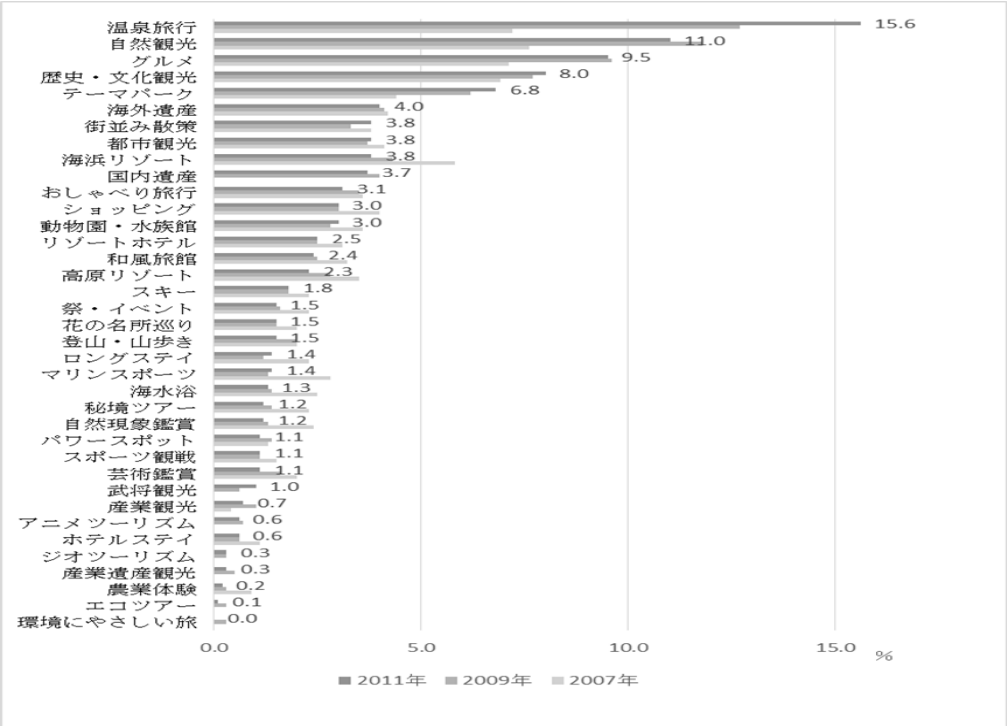
また日本交通公社（2013）の調査の「旅行に出かけた動機（複数回答）」の質問（＜図 1＞）でも 2009、2010 年、2011 年の調査でいずれも 21 項目中第 1 位が「日常生活から解放されるため」で全体の約 6 割が選択しているほか「保養、休養のため」が 3 位となっていて上位 3 位のうち 2 つが心身の癒しに係る要素となっている。

＜図 1＞旅行に出かけた動機（複数回答）（単位％）



出典：㈶日本交通公社（2013）『旅行者動向 2012』p.90

＜図 2＞今後行ってみたい旅行タイプ（単位％）



出典：㈶日本交通公社（2013）『旅行者動向 2012』p.66

さらに「今後行ってみたい旅行タイプ（複数回答）」の調査（＜図 2＞）でも 2007 年、2009 年、2011 年のいずれも、上位 3 位に「温泉旅行」「自然観光」が入っているほか、「海浜リゾート」「リゾートホテル」「高原リゾート」など日常の喧騒を離れて過ごす「癒し滞在」が上位にランクインされている。

このように複数のデータから、心身の癒し、ひいては心身の健康に係る観光需要が高いことがデータ的にも裏付けがあると考えられる。

Ⅲ．ヘルスツーリズム取り組み観光地のウエルネスツーリズム施策の現状と課題

1．ヘルスツーリズムの取り組み観光地と事例

ヘルスツーリズムとは、端的に言えば「健康に係るツーリズムの総称」である。

Ⅰ章 2 で述べたとおり、日本ヘルスツーリズム推進機構（2017）によると、「ヘルスツーリズム」とは、「健康・未病・病気の方、また老人・成人から子供まですべての人々に対し、科学的根拠に基づく健康増進（EBH: Evidence Based Health）を理念に、旅をきっかけに健康増進・維持・回復・疾病予防に寄与するもの」である。

研究者により見解が分かれるが、主流な考え方としては、健康に係るツーリズム「ヘルスツーリズム」が上位概念にあり、その下位概念として、「治療」をメインの目的とする「メディカルツーリズム」と「治療以外の健康に係るツーリズム」をメインとする「ウエルネスツーリズム」がある[3]。

本章では、日本ヘルスツーリズム推進機構がホームページ上で掲載している 2 次データ（推進地一覧早見表）を基に、一部筆者の実地調査やこれまでの研究過程により確認したものも加えたウエルネスツーリズム施策の推進地や実施主体組織を取り上げた。そこでの取組内容と提供プログラムについては、日本ヘルスツーリズム推進機構の推進地一覧早見表を基に、改めて全施設のホームページを確認して本稿執筆時点の最新情報に修正、かつ一部の地域・自治体および施設については筆者の実地調査を踏まえた修正を施してまとめたものが＜表 1＞である。

34 事例のうち、自治体は 11、その他は宿泊施設などの組織の取り組みである。このうち、本稿では、統合療法をベースとした各種プログラムを複合的に提供することをコンセプト（目的）としたリゾートを「ホリスティックリゾート」と定義し、他の宿泊プランもある中での 1 プランや 1 プログラムとしてウエルネスプログラムを展開する宿泊施設とは、区別して表記する。

[3] 2000 年以降のウエルネスツーリズムの先行研究では、Erfurt-Cooper & Cooper（2009）や Sheledon と Bushell（2009）は、本文で掲げた「ヘルスツーリズムは健康の領域を包括するツーリズムの（上位）概念」とする考えには反対しているが、それ以外は概ねこの見解を取っている。詳細は稿を改めて詳述する。

＜表 1＞　ヘルスツーリズムの取り組み観光地および組織とその事例

地域	取り組み自治体/組織	取組内容
北海道	ルスツリゾート(倶知安町)	・ウエルネスプログラム提供 （メディカルチェック，食事（健康メニュー），レジャーアクティビティ，温泉，アロマトリートメント，健康講演会開催） ・自然療養
青森	蔦温泉旅館(十和田市)	・滞在療養　・自然療養
秋田	玉川温泉・新玉川温泉(仙北市)	・滞在療養　・健康食　・温熱療法
山形	上山市	・クアオルトウォーキング　・旅館での健康食メニュー　・観光まちづくり（上山温泉クアオルト事業）　・温泉
宮城	鳴子温泉　旅館大沢	・滞在療養
福島	磐梯温泉観光協会(二本松市)	・トータルウォーキング
	スパリゾートハワイアンズ（いわき市）	・スパリゾート　・現代湯治プログラム
神奈川	江の島アイランドスパ（藤沢市）	・温泉併用型健康増進施設　・ホリスティックリゾート
新潟	眺瞰の宿　美生館（阿賀野市）	・温泉　・食事（地産地消ベース）
	松之山温泉　加賀屋（十日町）	・滞在療養　・食事（マクロビオティックメニュー）
石川	能登島地域づくり協議会（七尾市）	・自然療養
山梨	保健福祉ホテルフフ山梨（山梨市）	・ホリスティックリゾート
長野	軽井沢市	・森林セラピーを中心としたウォーキング，トレッキング等各種プログラム，健康食メニューを提供する宿泊施設が複数ある
	いのちの森 水輪（長野市松代高原）	・ホリスティックリゾート
	蓼高原生園（安曇野市）	・ホリスティックリゾート
	茅野市	・八ヶ岳スーパートレイル（トレッキング・ウォーキング）
	斎藤ホテル（上田市）	・滞在療養　・温熱療法プログラム　・エステ　・食事（地産地消ベース）
岐阜	岐阜グランドホテル（岐阜市）	・食事（薬膳料理）
静岡	熱海市	・「熱海湯治」 ・NPO法人AMIC（熱海（Atami）メディカル（Medical）インター（Internet）クラブ（Club））により，温泉療法・運動療法・食事療法の指導者養成および各種イベントの実施。
三重	メナード青山リゾート（伊賀市）	・ビューティ&ヘルシープログラム（エステ・運動療法・健康食・各種体験プラン）　・温泉　・自然療養
	ララサ志摩（鳥羽市）	・滞在療法　・エステ　・食事療法　・運動療法
兵庫	有馬温泉　太閤の湯（神戸市）	・温泉併用プログラム型健康増進施設　・森林セラピーウォーキング　・エステ　・温泉
和歌山	熊野古道（田辺市）	・健康ウォーキング　・自然療養
	HOLISTIC SPACE JAPAN MEDICAL& RESORT（新宮市）	・ホリスティックリゾート　・統合療法医療施設
鳥取	三朝町	・現代湯治（温泉医療体験・温泉・自然療養）
島根	森のホテル「もりのす」（邑南町）	・森林セラピー
長崎	ヘルスケア・リゾート　ザ・ソアラ（ハウステンボス）	・ホリスティックリゾート
熊本	玉東市，玉東プリンスホテル	・健康ウォーキング
	TAO Retreat & Cafe（阿蘇市）	・自然療養　・食事（オーガニックメニュー）　・テトックスプログラム
大分	クアージュゆふいん（由布市）	・ドイツ式温泉療養体験
	竹田市	・温泉療養保健システム　・ウォーキング
鹿児島	ララ奄美の郷宿（奄美大島）	・滞在療法　・地形療法
沖縄	かんなララ（宜野座村）	（日帰り施設）・滞在療法　・運動療法　・ウエルネスプログラム
	久米島	・食事（島内宿泊施設でのアレルギー対応食）

*ホリスティックリゾート：
統合療法をベースとした各種プログラム（メディカルチェック，食事療法，運動療法，温泉療法，食事療法，アロマトリートメント，平坦療法等）を複合的に提供することをコンセプト（目的）としたリゾート

（注：各種宿泊プランの一つとして各種ウエルネスプログラムを提供する宿泊プランを有する，または施設内に一部ウエルネスプログラム提供施設がある，ウエルネス療法の提案をしている等の場合はプログラムとして掲載）

出典：日本ヘルスツーリズム推進機構ホームページ（2017）を基に筆者にて加筆・修正

日本中のあまねく全てのヘルスツーリズムを推進している地域や自治体、組織を網羅しているとは言えないものの、日本においてヘルスツーリズム要素を踏まえた観光まちづくりや宿泊営業を行っていて、それらを標榜している主な代表的な地域・自治体や宿泊施設、組織について、および実施主体と主要な取り組みについては、取り上げられているものと考える。

2. ヘルスツーリズムの取り組み観光地と事例の課題

前節で＜表 1＞でとりまとめた自治体・地域、および組織の取り組みから、本節では、現状のヘルスツーリズムの取り組み観光地と事例の課題について検討していく。

まず自治体・地域の取り組みは、全体 34 の取り組みのうち 11 自治体に留まっており、自治体や地域全体での取り組みの難しさが示唆される。各地域内で、それぞれの長い歴史の中で、個々の宿泊施設やその他観光施設が、各々で様々なコンセプトで営業をしてきており、こうした状況下で、「ヘルスツーリズム」というコンセプトで一括りにしてベクトルを一にして取り組むには、どうしても困難が伴うものと考えられる。こうした中で、自治体の取り組みの半数以上が温泉地での取り組みとなっていることが、今回、一覧表化することで明らかになった。

日本は明治時代に鎖国が解かれ、西洋から解剖学や疫学を踏まえた様々な対症療法的な療法をベースとした西洋医学が紹介され、それ以来、日本の医学界においては、今日に至るまで、対症療法的な西洋医学が治療・医療の中心となっており、その結果、統合医療である温泉療法は徐々に日本の治療・医療の主流から外れ、各地の温泉病院なども年々閉鎖される状態になっている。また高度経済成長期以降、日本の多くの温泉地では、団体旅行需要を背景に歓楽の場と変遷していき、多くの伝統的な湯治場は集客が減少し、温泉療法をベースとした湯治滞在は、日本の温泉地全般の傾向としては、衰退の一途を辿ってきている。一方、ドイツをはじめとした欧州諸国では、対症療法、統合医療双方が歴史的に併存してきており、歴史的に多くの温泉地は日本の温泉地のような歓楽場としてではなく、温泉療法を踏まえた温泉保養地として今日に至っている。こうした温泉医療や温泉地の歴史的な変遷の違いにより、ドイツなどでは古くから温泉地では温泉療法をベースとした滞在が提供されている中で、日本ではそれが実現できてない状況にある。こうした歴史的背景に伴い、「温泉」という心身の健康効果をもたらす資源を有していながら、日本の温泉地では、それらを活用した滞在スタイルはまたそれほど多く提供されていない。「温泉」という心身の健康効果をもたらす資源を有している「温泉地」の場合、特に三朝温泉のラドン泉など、医科学的なエビデンスが整いつつある泉質の温泉を有する場合は、そこが差別化やオリジナリティ、アイデンティティに繋がるため、ヘルスツーリズム的な取り組みが行いやすいものと考えられる。また自治体・組織を問わず、全体的に自然環境を活かした湯治滞在の占める割合が多い。したがって「温泉地」が健康や癒しをキーワードにウエルネス観光まちづくりに取り組むことは、活性化の１つの切り口として有用であることが考えられる。

しかしながら、それ以外の取り組みについては、ウォーキング、地産地消の自然食ベースの健康食の食事提供の域でとどまっている事例が多い。上山市のかみのやま温泉を中心に、熊野古道や由布院などで取り組まれているクアオルトの取り組みがあるが､本場ドイツの取り組みと違い、発展途上にある現段階においては、活動の中心がウォーキングの取り組みに留まっている現状にある。このように自治体・地域においては、総合的なウエルネスプログラムの提供に至っていない状況が＜表 1＞からも読み取れる。言い換えると、ヘルスツーリズムの取り組み観光地と事例の現状を鑑みると、多様なウエルネス需要への適応状況において、ウォーキングプログラムや食事提供という部分的なウエルネス需要への適応に留まっているということが確認できる。

一方で個別の施設においては、数としては多くないが、ホリスティックリゾート（つまり、統合療法をベースとした各種プログラム《メディカルチェック、食事療法、運動療法、温泉療法、食事療法、アロマトリートメント、手技療法等》を複合的に提供することをコンセプト《目的》としたリゾート）をはじめ、いくつかのウエルネスプログラムを提供する施設も出てきている。このような現状を勘案すると、こうした施設をベースにすることで、自治体・地域においても、総合的なウエルネスプログラムの提供が可能なウエルネス観光まちづくりの一助になるものと考えられる。

Ⅳ．ウエルネス滞在リゾートとウエルネス観光まちづくりへの活用

1．ウエルネス滞在リゾート

「ウエルネス滞在リゾート」という言葉は、観光学研究において、あるいは一般の観光産業界においても確立ないし定義化されている用語ではない。そこで本稿においては、Ⅲ章 2 節（ヘルスツーリズムの取り組み観光地と事例の課題）で取り上げた、統合療法をベースとした各種プログラム（メディカルチェック、食事療法、運動療法、温泉療法、食事療法、アロマトリートメント、手技療法等）を複合的に提供することをコンセプト（目的）とした「ホリスティックリゾート」をはじめ、各宿泊施設が提供しているサービスの一環として、ホリスティックリゾートが提供しているようなウエルネスプログラムのうちの複数のプログラムを提供している宿泊施設を総称して「ウエルネス滞在リゾート」と定義することとする。

2．ウエルネス滞在リゾート事例－山梨市牧丘町 保健農園フフ山梨－

本節では､「ウエルネス滞在リゾート」のうち筆者が実地調査として訪問・滞在し施設で行ったヒアリング調査および滞在中の観察を基に、ウエルネス滞在リゾートの事例をとりあげる。

上述（Ⅲ章 1 および前節）のとおり、本稿では、統合療法をベースとした各種プログラム（メディカルチェック、食事療法、運動療法、温泉療法、食事療法、アロマトリートメント、手技療

法等）を複合的に提供することをコンセプト（目的）とした宿泊施設を「ホリスティックリゾート」と定義している。ホリスティックリゾートは、まだ数は多くないが、本節では、その一例として、山梨市牧丘町の「保健農園フフ山梨」を題材に、紙面の都合上、主にホリスティックリゾートなるものの概要について重点を置き取り上げる。なお、文章の内容は、フフ山梨ホームページおよび 2017 年 9 月 5 日から 9 月 8 日に行った　　株式会社グリーンドック春日未歩子取締役およびフフ山梨チーフマネジャー近藤司氏へのヒアリング調査および現地での観察によるものである。

「保健農園フフ山梨」は、関東地区および九州地区に拠点を置き、精神科医療および高齢者医療・介護の分野を中心に事業を展開している翠会ヘルスケアグループのグループ会社である株式会社グリーンドックが運営・管理を担っている。5 年前に山梨県から今ある施設を借り受けてホリスティックリゾート展開を始めた。フフ山梨では、心身の健康を保つために必要なアプローチに基づきプログラムや施設をコーディネートされているリゾートで、通常のリゾートホテルと違い、様々なプログラムが提供されており、滞在者はそれらを必要に応じて活用し、心身のリラックス、リフレッシュをはかり、心身の健康を取り戻すことができる。メインターゲットを働く女性に絞り展開を始めたが、雑誌等メディアに取り上げられるにつれて来客数も増加し、今ではターゲット層以外にも賛同する顧客が訪れるようになった。リピーター率は 10～15％であるが増加傾向にある。宿泊費が 1 人 1 泊 2 万円台と高めのため、年間のリピート回数は 2 回程度と多くはないが、年末年始はほぼリピーターで埋まってしまうなど、コアなリピーター層が多い。週末は他の宿泊施設に漏れず家族連れ比率が高まるが、平日には都心のヨガスタジオやクリエイティブ関連企業の研修にも利用され始めている。

ここの特徴は、まずは緑に囲まれた自然豊かな環境とそこに広がる広々とした施設空間にある。周辺が山梨市の森林セラピーロードに認定されている自然環境の中で、自然に触れながら穏やかに滞在できる。かつ旧来の湯治場にある様な雑多な生活空間や気を遣う共同生活、解放感が無く却って心身が閉じ籠ってしまいそうな狭い居住空間とは無縁で、落ち着いた環境と生活空間および、広々とした居住空間で自分を取り戻す心地よい滞在が可能である。特に日々の業務で忙殺され自分を失いかけた人々が、都会の喧騒を離れリセットするには最適な環境である。

2 つ目の特徴として、かつ最大の特徴は、朝昼夜と毎日日替わりで定期的に行われる心身を整えるプログラムの提供にある。午前は坐禅やマインドフルネスヨガなど、昼は農作業や食事作り、夜は医学的なエビデンスに基づく筋膜リリース法や操体法のプログラムがそれぞれの専門家によって提供される。プログラムは本人の希望で必要なプログラムの選択が可能である。定例プログラム以外の時間は、自然環境の中で気ままに過ごすもよし、さらに森林セラピーや各種トリートメント、自律神経バランス測定や個別カウンセリングなど、個々の状態や必要に応じてオプショナルプログラムを選択して過ごすこともできる。滞在者それぞれが、自分に向き合いながら、自

分のペースで心身の健康を取り戻していける「ウエルネス滞在リゾート」である。

3.「フフ山梨」の事例から考察したウエルネス滞在リゾートのウエルネス観光まちづくりへの活用に関する方策

①幅広いウエルネスの概念に対応できるプログラム提供

Ⅱ章１において、「ウエルネスを体現化し、メインとする目的を治療以外に置くツーリズム」を「ウエルネスツーリズム」と定義した。しかし、「メインとする目的を治療以外に置くツーリズム」というのは実に多岐に及ぶ。つまり「ウエルネスツーリズムとは内包される旅行時の行動が極めて多様で広範なツーリズム」なのである。先行研究でもこの点は指摘されており、その一例として、例えばGWI（2015）は、ウエルネスツーリズムにかかる学術的な論文や産業ベースの文献を見渡すと、定義が専らスパに特化したものから、数え切れないニッチなツーリズム（芸術に係るものや、ヒーリング・ヨガなどのリトリート体験、スポーツやフィットネス、エコツーリズム、アグリツーリズム、フードツーリズムなど）まで広範囲に跨っていることが明らかになると述べている。

ところが、Ⅲ章で挙げたとおり、既存の日本でのヘルスツーリズムの取り組みにおいては、ウォーキングプログラムや食事提供という部分的なウエルネス需要への適応に留まっている現状が多数見受けられ、この多様なウエルネスツーリズム需要の受け皿としては充分に機能しきれない現状が浮き彫りになっている。そのような状況下においても、ウエルネス滞在リゾート、中でも特にホリスティックリゾートにおいては、そのコンセプトの体現化を目指し、個々の施設の創意工夫や努力により、統合療法をベースとした様々なプログラムを提供し、多様なウエルネスツーリズム需要の受け皿として機能しリピーター化が進んでいる。このような現状を勘案すると、こうした施設を核施設として活用し、ここをベースに展開を進めることによって、自治体・地域においても、総合的なウエルネスプログラムの提供が可能になると考えられる。

②自治体と民間企業とのタイアップによるウエルネスツーリズムディスティネーションとしてのブランド確立とハード・ソフト両面の協業

自治体の場合、ウエルネスツーリズムディスティネーションとしての観光政策やまちづくり政策への反映、特区対応などの規制緩和などへの対応、土地・建物の権利関係など、フレームワークづくりやハード面への優位性が高い。一方で、公共の福祉や全住民への偏りないwelfareの分配、職員の定期的な人事異動などもあり、特定分野への傾注や持続的な企画運営といったソフト面の持続的な展開には不向きな部分がある。

したがって＜表１＞でも浮き彫りになっているが、自治体の取組内容の多くが、ウォーキングや自然環境整備の域に留まっており、より突っ込んだウエルネスプログラムの提供には至ってい

ないことが多い。専門性の高さ、フットワークの軽さ、プログラムの自由度、人材確保の柔軟な対応といったウエルネスプログラムの持続的提供に欠かせないソフト面については、どうしても民間企業に分がある。したがって、事例検証からも想起されるように、ウエルネス観光まちづくりの成否は、自治体と民間企業のタイアップにより、例えばハード面とソフト面、ウエルネスツーリズムディスティネーションとしての制度立ち上げや仕組みづくりと持続的かつ柔軟な企画・運営展開、という双方の得意分野を活かしつつ不得意分野を補完しあう協業が有効であることがわかった。

事例に挙げたフフ山梨の場合、ハード面は山梨市の所有物であり、管理・企画運営を民間の株式会社グリーンドックに委託する形態となっている。これが、結果として、専門性の高さ、フットワークの軽さ、プログラムの自由度、人材確保の柔軟な対応という民間企業としての利点に傾注できる状況をもたらし、民間企業の利点を活かした企画・運営を可能とし、ターゲット顧客層の満足度を高め、リピーター化や、次回滞在の長期滞在化をもたらしており、この点を裏付ける結果となっている。

Ｖ．おわりに

1．まとめ

本稿では、ヘルスツーリズムのうち、「治療」をメインとするツーリズムの「メディカルツーリズム」を除く、「健康志向」や「癒し志向」基づく「ウエルネスツーリズム」をベースにした観光まちづくりの現在の日本各地における推進事例を取り上げ精査した。それにより、現行では、日本各地におけるヘルスツーリズムの取り組みのかなりの割合が、温泉地の「湯治滞在」や、「ウォーキング」を中心とした取り組みに留まっており、広範なウエルネスプログラムの提供には至っていない現状が明らかになった。

ウエルネスツーリズムはその領域が非常に多岐に渡る概念であり、「湯治滞在」や「ウォーキング」プログラムの提供だけでは、多様なウエルネスツーリズム需要の一領域にしか応えられておらず、より多様な需要に対応していく事が、今後のウエルネス観光まちづくりの鍵であることが判明した。

こうした多様なウエルネス需要に対応出来ているのが、統合療法をベースとした各種プログラムを複合的に提供することをコンセプト（目的）としたホリスティックリゾートや、数ある販売施策の一環としてウエルネスプログラムのうちの複数のプログラムを提供している「ウエルネス滞在リゾート」という主に民間の宿泊施設である。

こうした民間企業と自治体が、ウエルネス観光まちづくりでタイアップして取り組むことで、幅広いウエルネス需要に対応出来るウエルネス観光まちづくりに繋げていける、という結論を導

き出した。

2. 今後の課題

①人材確保など持続的展開への課題

各種ウエルネスプログラムの中には、ヨガやアロマテラピーなど、世間的な知名度が高くて愛好者数が多いプログラムもある。こうしたプログラムの場合は、需要が高いため、その分インストラクターやセラピストを志す人達も多く、地方都市であっても、ある程度、講師数は確保できる可能性は高く、欠員の補充も問題ないかもしれない。しかしながら東洋医学系のプログラムをはじめとしたマイナーなプログラムの場合、多様なウエルネス需要に対応可能で、一時的に人気が出るかも知れないが、ひとたび講師が欠員すると、後任の講師が見つからず、持続的な展開には繋がらない。特に、自然環境に恵まれた田舎の場所であればあるほど、居住人口が都会のように多くない事から、人材の確保が困難になる。

事例に挙げたフフ山梨の場合、この点ついてヒアリングで確認した際、幸い近隣に甲府市という地方都市があり、様々なウエルネスプログラムに取り組む意欲的で比較的若い指導者が多く居るので、多様なプログラム展開も可能で非常に助かっているとの事であった。しかしながら、この例は極めて恵まれた事例であり、実際のところ、多くは人材の確保が極めてネックとなる。2013年９月の東北の田園風景の中に佇む東鳴子温泉の旅館大沼の宿主大沼伸治氏へのヒアリングで同様の質問をした際には、宿単体で様々なプログラムを提供しようと試みても、仮に宿泊施設のスタッフを指導者として養成したとしても、本業が忙しく定期的なウエルネスプログラムの講師に充てることは難しく、さりとて周辺に大きな都市もなく居住人口が少ないため、講師を見つける事すら困難で、持続的で多様なプログラム展開は、宿単体の努力では限界があるとの事であった。自然環境に恵まれたウエルネス滞在に相応しいエリアであればあるほど、多彩なプログラム展開における人材確保の困難さというジレンマに直結するのである。

解決策としては、自治体が中心となって地域住民に行う健康まちづくりの一環で、気功や座禅、太極拳、あるいは温泉地であれば湯中運動など、少子高齢化が進む地域の高齢者の住民にも取り組みやすくて愛好家も多い健康まちづくりプログラムを持続的に実施し、その中で講師に耐えうる人材づくりを行うことが挙げられる。あるいは自治体や提供宿泊施設が、都会のヨガやアロマテラピーなどの講師養成校を自前でつくるあるいは養成校と提携して人材派遣システムを確立するなどの手段が考えられる。しかしながら予算や人材、その他諸要因が絡み、実施が容易ではなく、多様なウエルネスプログラムの持続的展開への基盤づくりが今後の当面の課題である。

②健康まちづくりと観光まちづくりの融合という理想的展開の実現困難さの課題

前項で挙げたとおり、多くの地方エリアにおいて、少子高齢化が課題となっていて、医療費抑

制や地域交流の促進の観点から健康まちづくりを実施する自治体は多い。そうした健康まちづくりのプログラムを、観光客にも開放するなどし、ウエルネス観光まちづくりと健康まちづくりを融合して展開出来れば非常に理想的である。健康まちづくりに取り組む地域としてのブランドが確立すれば、定住人口増加に繋がる可能性があると同時に、その地域の住民が健康である、あるいは健康に意欲的に取り組んでいることが、その地域がウエルネス観光まちづくりを行う際に、観光客に対して非常に大きな説得力をもつ。したがって、健康まちづくりと観光まちづくりの融合が、ウエルネス観光まちづくりの理想的展開との仮説をたて、そうした研究にも着手しはじめた。しかしながら現実の壁は高く、管見のところそれが成功し機能している観光地事例を見出せていない。例えば、鳥取県の関金温泉が、2011 年以来健康まちづくりとして取り組んだ湯中運動が地域に根付き、この湯中運動を観光客にも開放、拡大展開したプラチナプロジェクト健康マイレージの取り組みを実施した。健康まちづくりと観光まちづくりの融合の仮説を裏付ける取り組みであり大いに期待した。しかしながら関金温泉旅館組合事務局長の芦田倍芳氏[4]によると、いわゆるマイレージシステムを援用した取り組みであったが、利用は地域住民に偏り、観光客には展開手法に問題があり根付かずに終わったことが判明した。

このように、ウエルネス観光まちづくりを少子高齢化に直面する地域の健康まちづくりに結び付け、相互展開が図ることが出来れば理想的ではあるが、様々な困難さは否めず、こうした困難を克服し、ウエルネス観光＆健康まちづくり展開に繋げていくための解決策を見出していくことが、今後の中長期的な将来的課題である。

【参考文献】

伊藤洋（2000）「現代社会におけるメンタルヘルス（精神保健）」財団法人航空医学研究センター『乗員の健康管理サーキュラー』23、1-17 頁。

西村典芳（2016）『ヘルスツーリズムによる地方創生__健康長寿を目指して「お散歩でこの国を元気にする」』カナリアコミュニケーションズ。

日本観光振興協会（2017）『平成 28 年度版観光の実態と志向』（公社）日本観光振興協会。

日本経済新聞社（2015）「2015 年 8 月 28 日電子版 『健康寿命』日本トップ　男性 71.1 歳、女性 75.5 歳」http://www.nikkei.com/article/DGXLASDG28H2A_Y5A820C1000000/ ,2016 年 8 月 30 日閲覧。

日本交通公社（2013）『旅行者動向 2012』（公財）日本交通公社。

日本ヘルスツーリズム推進機構（2017）「ヘルスツーリズムとは」

[4] 2017 年 7 月 29 日 健康と温泉フォーラム 第 72 回月例研究会にて確認

http://www.npo-healthtourism.or.jp/about/（2017 年 10 月 28 日閲覧）。
野崎康明（1994）『ウエルネスの理論と実践』メイツ出版。
保健農園フフ山梨ホームページ（2017）http://fufuyamanashi.jp/（2017 年 10 月 28 日閲覧）。
Erfurt-Cooper, P and Cooper, M (2009), Health and Wellness Tourism: Spas and Hot springs, Bristol, Channel view publications.
GLOBAL WELLNESS INSTITUTE (GWI) (2015), “Executive summary: what is wellness”, The Global Wellness Tourism Economy 2013 & 2014, Miami, GLOBAL WELLNESS INSTITUTE National Wellness Institute: About Wellness, http://www.nationalwellness.org/?page=AboutWellness, (2015. 9.19).
Powis, B and O’Leary, Z (2009), “Wellness tourism and health promotion.” In Bushell, R and Sheldon,J. Pauline (Eds.), Wellness and Tourism: Mind, body, spirit, place, New York, Congnizant Communication Corporation.
Sheldon,　J. Pauline and Bushell, Robyn (2009), “Introduction to wellness and tourism.” In Bushell, Robyn and Sheldon, J. Pauline (Eds.), Wellness and Tourism: Mind, body, spirit, place, New York, Congnizant Communication Corporation, p6.
Smith, Melanie and Puczkó, L (2014), Health, Tourism and Hospitality: Spas, wellness and medical travel (2nd edn), New York, Routledge.

【Abstract】

In this study, firstly, it is looked at the case of the town development based on Wellness Tourism in Japan. As it turned out that, today in Japan, many kinds of the cases of Health tourism on the town development are just the hot spring cure or the effort of walking program. Today, the case of the town development based on Wellness Tourism in Japan cannot meet the wide-ranging needs of Wellness Tourism customers. On this study, it could be found out that we can meet the wide-ranging needs of Wellness Tourism customers by utilizing Holistic Resort and Wellness Resort on the town development based on Wellness Tourism in Japan.

【 研究ノート 】

A Place to Long For:
The Representation of Paris in Hollywood Films

Karen Nishioka*

【ABSTRACT】

In terms of tourism, there are few cities that attract tourists more than Paris especially in the cultural context. As seen in the number of films produced in Hollywood over the years, such as the classic Vincente Minnelli's *An American in Paris,* (1951) and Woody Allen's recent film called *Midnight in Paris*, (2001) Paris has always carried a special symbolical meaning.

In this paper, I will analyze films made in different eras in the United States as well as consider the symbolical role Paris has played in American movies.

Keywords：Paris, tourism, films, *Revolutionary Road*

I. Introduction

Paris has always been a unique destination for tourists. "Paris Syndrome" is a word created by a Japanese psychiatrist, Hiroaki Ota, to indicate the psychological condition experienced by Japanese tourists who are disappointed when Paris does not live up to their expectations. However, Paris Syndrome is not exclusive to Japanese tourists though. The city has been selected as one of the most disappointing tourists' destinations by a number of web articles by Americans as well.

Idealized images of Paris in Hollywood films are partly to be blamed for tourists' high expectations for the city to cause later disappointments. As Levenstein says:

> In this volume I show how these ideas, along with disgust over French people's standards of personal hygiene and their apparent propensity to eat revolting foods, persisted through the Great depression of the 1930s and blossomed again after World War II. (Levenstein 5)

However, despite Paris's hygiene issues and the Parisians' sometimes featured hostility toward Americans, it seems that in the history of Hollywood, nothing has really changed the desirability of Paris.

In this paper, I will examine why and how Paris was idealized in American films. In the first section, I

*Graduate School of Human and Environmental Studies, Kyoto University

will see the relationship between France and the United States in the historical and cultural contexts. In the next chapter, I will briefly look back to the cinematic description of Paris in American films and compare them to the Paris images in French films. Then in the final chapter, I will analyze how the American film *Revolutionary Road* embodies the ultimate image of Paris as an antithesis to American dreams. After redefining the cultural relationship between France and the United States, I will argue how *Revolutionary Road* is a film that criticizes the American dream by showing how the city Paris is portrayed as the idealized place beyond the reach of the American people.

II. Defining the Relationship Between France and the United States in the Cultural Context

Despite its overwhelming economic growth, the United States of America, being relatively a young country, has always exhibited a sense of cultural inferiority toward the European countries. Although the United States has its roots in Britain and other European countries, the rhetorical simplicity of American literature, for instance, contrasts with the Shakespearean style of British literature. I see this as American writers having always had the inferiority complex toward European writers——for American writers, keeping their writing style simple is the way to rebel against the rich historical background of the writers in Europe and find their own originality. Mark Twain is the first of those writers who established the Americanness in the field of literature. Nevertheless, the lack of the rich historical and cultural backgrounds has always been problematic for American artists.

As Watanabe argues, the difference between the Eiffel Tower and the skyscrapers in New York tells the difference between the cultural standards of these two countries. Watanabe, quoting Magda Révész-Alexander's words, claims that whereas the skyscrapers in the States function as a mere display of

material success, the Eiffel tower is more about the beauty and the spirituality in it. (342) It is interesting to note that whereas in Paris, the landmark building in the city symbolizes beauty and spirituality, in New York, the landmark buildings such as empire state building and the now-gone world trade center first symbolizes commercial success.

For the American writers who belong to the lost generation, such as Gertrude Stein, Ernest Hemingway, F. Scott Fitzgerald and so on, the disgust toward American materialism is one of the driving forces to move to Paris. These writers doubted the American values, which were driven by material success and instead considered Paris to be a more civilized place. As Woody Allen's *Midnight in Paris* (2011) tactfully describes, the image of Paris to Americans consisted of the romantic imagination of the legendary writers who were expatriates of the lost generation. Field mentions tourists and expatriates as follows:

> When *The Sun Also Rises* was published in 1926, F. Scott Fitzgerald famously dubbed Ernest Hemingway's novel "a romance and a guidebook" (Aldridge 123). The novel was celebrated as a *roman a clef* that depicted an actual segment of Parisian expatriate society…. Hemingway was reputedly disdainful of tourists, yet the novel's repetition of place names is organized into itineraries similar to those of travel guides contemporaneous to the novel. (1)

As Field says, the novels of the writers of that time or those writers' biographies functioned as a guidebook to the American tourists and stimulated their imagination of Paris as a capital of high culture in contrast to the materialist culture that ails the cities of the United States. The protagonist of *Midnight in Paris* is a typical American who idealizes Paris based on his imagination of what the city was like when those famous writers were around. For him, having traveled back in time to enjoy the company of the American legendary writers, the Paris of yesteryear appears more real than the real Paris. It is noteworthy that for those romantic Americans, the idealized Paris does not necessarily revolve around the real Parisians but the expatriates from the United

States instead. Hence, the image of Paris does not reflect the reality of Paris; it is based on the relationship between Paris and the States.

In this section, I have argued that Americans have always felt Paris to be culturally superior to them. Paris symbolizes a higher culture based on spiritual values whereas New York or the other American cities are considered more of a symbol of a material success. One can observe the Americans' sense of cultural inferiority through the history of literature and description of Woody Allen's *Midnight in Paris*. Looking back to the history, there was a reason why Americans idealized Paris especially in the cultural context.

III. General Film Representations of Paris

Hollywood films, which have attained commercial influence to a certain extent, have a deep relationship with the tourism industry. The films depicted cities in which they set their stages as more fascinating places than those cities actually are. For example, *Love Is a Many-Splendored Thing* (1955) describes beautiful and exotic sceneries of Hong Kong. *Memoirs of a Geisha* (2005) presents Japan as far more a beautiful place than it is. It goes without saying that Hollywood films have also promoted the cities in the United States. Their glorified descriptions of cities like New York, Los Angeles, Chicago, New Orleans and so on have given each of them distinctive characters. Famous sites such as the Empire State Building in *An Affair to Remember* (1957) and Brooklyn Bridge in *Sex and the City* (2008), have never ceased to attract tourists throughout the years.

Apart from the cities in the United States, Paris is perhaps the most popular foreign city that Hollywood films have ever set their stages in. No other city has carried as special a meaning as Paris in the history of American cinema. The fact that the word "Paris" appears in so many film titles such as *A Scandal in Paris* (1946), *The Last Time I Saw Paris* (1954), *An American in Paris* (1951), *Forget Paris* (1995), *Midnight in*

Paris (2011), is a proof of how popular Paris is. No other city has appeared in film titles as frequently as Paris. Paris is always depicted as a place for characters to escape the reality and to experience the higher culture. Among the classical Hollywood films, Vincent Minelli's *An American in Paris* is a representative film that portrays Paris as the capital of art and dreams. *An American in Paris* portrays the typical American representation of Paris as most of the main characters speak English even though they live in Paris. The protagonist, played by Gene Kelly, is a painter whose works does not sell well. His friend is a pianist who never holds a concert. For Americans, Paris is a place for these artists and dilettantes. In this film, Paris is not an actual place but somewhere in a beautiful painting. Everything is over-romanticized there. The protagonist falls in love with a typical French girl, who speaks fluent English with a bit of French accent. This film is all about how the image of Paris is formed among Americans: beautiful, artistic, romantic and sexually liberative.

After the French New Wave, films made in France changed the way French people describe Paris. As Watanabe confirms, before the New Wave, they used a studio settings to shoot Paris. However, the directors of the New Wave used locations to shoot Paris in a more realistic way. (Watanabe 342) Thus, the image of Paris drastically changed from a dreamy one into a rough, darker one. For example, Jean-Luc Godard's *À Bout de Souffle* is a realistic representation of Paris, which has distanced itself from the previous romantic and artistic images.

While French directors were struggling to get rid of the stereotypical images of Paris, Paris in American films persisted as romantic, distinguishing itself from any of the American cities. No matter how bad the political tension between the United States and France became, Americans were in favor of Paris. Gradually, the representation of Paris became so unrealistically idealized that it became a place of a concept or a symbol in American films. In the next section, I will show how a film called *Revolutionary Road* reduced Paris into a mere symbol for Americans.

IV. Paris Representation in Sam Mendes' *Revolutionary Road*

IV-1. Wheelers as the Symbol of the American Dream

Although *Revolutionary Road* (2008) is a film directed by a British director Sam Mendes, this film is distinctively an American film. Setting its stage in 1950's American suburb, the film describes a couple, played by Kate Winslet and Leonardo DiCaprio, and their children. This family, called the Wheelers, looks like a perfectly happy family. The father, Frank, is a businessman who works in an office in New York. The mother, April, is a beautiful and able housewife admired by their neighbors. When the wife suggests, out of the blue, that they should move to Paris, the tragedy begins. At first, the idea of going to Paris seems too unrealistic but the husband is gradually convinced by the idea. Just before moving to Paris, April gets pregnant and they have to give up the idea of going to Paris, which would destroy the couple's relationship. In the end, April dies after performing self-induced abortion.

In the 1950s, to live in a house in the suburb with a family meant attainment of the American dream. According to OED, "American dream" is defined as follows:

> {American dream}, the ideal of a democratic and prosperous society which is the traditional aim of the American people; a catch-phrase used to symbolize American social or material values in general. (OED)

As a young country, America prided itself on giving equal opportunities for those who works hard. The American dream basically means material and economical success. Only after World War II, the concept of a home of one's own in a suburb was connected to the idea of the American dream. Stoppa and Elena argue as follows:

> To sum up in a few words, the war contributed significantly to the economic recovery of America, so much so that no country (with the exception of Russia) was able to compete with it in the

> postwar years; America was declaring itself the most prosperous and powerful country in the world. It is here, in this general euphoria, in this renewed faith in its abilities and possibilities that the American dream can finally find its expression in the suburbs. (Stoppa, Elena 7-8)

April and Frank Wheeler in *Revolutionary Road* are exactly the ones who live up to the American dream in 1950s. Suburb seems to be a perfect place to settle for successful couples like them since it seemed to take in all the advantages of the city life and the country life. Their Americanness is emphasized through the fact that their house is built on a little hill and thus that they are always the target of their neighbors' eyes. This reminds audience of the John Winslop's sermon, "A Model of Christian Charity." In it, he quoted from Matthew 5:4 and told his listeners, "You are the light of the world. A city that is set on a hill cannot be hidden." Later, this concept of "city upon a hill" became popular in the political scenes in the United States and formed the American attitude as a nation: American Exceptionalism. When Mendes set Wheelers' house on a hill, it is apparent that he is alluding to this American Exceptionalism and dubs April and Frank Wheeler America or the American dream itself.

Suburbs, however, were not an ideal place as had been expected. It especially made some housewives unhappy and they felt trapped in a house. As Stoppa says:

> After the end of the War both the men who survived it and the government knew that it was just a matter of time before they would go back to their jobs and send their women back home. On the contrary women from their point of view were not sure they were willing to go back to their domestic role without making any complaint. The time had come for the government to build up another campaign, another alluring illusion that would make sure everything went back to its original balance. It was in this particular circumstance that the suburbs were chosen as the perfect means that would attract thousands of women into their 'golden trap' by enchanting them with the

> promise of a fairytale-like life built around the idea that the best achievement a woman could desire was to become a good wife and a loving mother. (Stoppa 48)

The suburbs, which were separated from the city and the country, confined the housewives to the middle of nowhere. At the same time, husbands became exhausted as a result of time-consuming commute to the city. Then, April, the wife, tells his husband that they should move to Paris even though they have no job, relatives or any kind of connection in Paris. By analyzing what Paris is to the Wheelers, the symbol of America itself, one can have a clear idea about what Paris is in Hollywood films.

IV-2. Paris as a Place to Long for

The images of Paris shared by the Wheelers sums up, to a large extent, the images of Paris formed traditionally by Hollywood films. Though they were an ordinary businessman and a housewife respectively, April tells Frank that he should be a writer or a poet once they move to Paris. The patriarchy that seems so rooted in the States can easily be shaken away. April also claims that in France, she will no longer be a housewife, but she will be the breadwinner of the family while Frank searches for what he really wants to do by reading and spending free time on his own.

“Why do you have to move to Paris?” is the repeated question posed to Wheelers throughout the film. For those people around them, there is practically nothing that can be found in America but only in Paris. There is absolutely no practical reason for them to move into Paris. What motivates them is the concept of Paris purely in the cultural context: a capital of freedom, art, beauty and dreams.

The Wheelers, who already lives up to the American dream, tries desperately to surpass that. As aforementioned, the American dream is a symbol of material and economic success based on the patriarchal system of the society. Subsequently, Paris surfaces as an antithesis to the American dream. It is completely

divorced from governmental propaganda, patriarchy and material success, but purely something to do with art, beauty, spirituality and freedom.

What is interesting about this film is that in the end, the Wheelers never get to go to Paris. Paris never once appears in the film. It only exists as a concept for Wheelers; it only exists in the dreams of the Wheelers. This description of Paris is the ultimate form of the American representation of the city of Paris. This shows that Sam Mendes is cognizant of the fact that Paris as Americans conceptualize never exists. It is different from the actual city that functions as a capital of France. Paris in American films was always a utopian place. It somehow crystallized as the sum of all the cultural and artistic elements that Americans thought they have missed out along the path of economical development. Paris as the Wheelers "talk about" sums up the Hollywood tradition of the representation of Paris.

V. Conclusion

No matter how different the real Paris is from the filmic description of it, one thing is clear. Americans have always respected Paris as the symbol of rich historical and cultural backgrounds that they could never dream of possessing, and this longing and respect are often represented in Hollywood Films. It is only natural that tourists feel disappointed after actually visiting Paris. So would the Wheelers in *Revolutionary Road* had they moved to Paris, which never happened. No matter how disappointing the tangible Paris is, the intangible concept of Paris as the capital of art, dreams and freedom will stay, as Humphrey Bogart puts it, "We'll Always have Paris". Tourists would relentlessly look for the fragments of Paris they saw in the American films.

【Bibliography】

Basinger, Jeanine. *I Do and I Don't: A History of Marriage in the Movies*. New York: Vintage, 2013. Print.

Coontz, Stephanie. *The Way We Never Were: American Families and the Nostalgia Trap*. New York: Basic Books,1992. Print.

Field, Allyson Nadia. “Expatriate Lifestyle as Tourist Destination: The Sun Also Rises and Experiential Travelogues of the Twenties.” *The Hemingway Review* 25.2 (2006):29-43.

Kelly, Christine. *The Man in the Gray Flannel Suit: An Examination of Suburbia, Organization Men, and Conformity in 1950s America. Valley Humanities Review* Spring, 2013.

Keys, Lisa. “*Revolutionary Road* and The American Dream”. Rev. of *Revolutionary Road*, Dir. Sam Mendes. learnonline-blogspot.it. Web. 17 June 2013.

Levenstein, Harvey. *We'll Always Have Paris: American Tourists in France since 1930*. Chicago: U of Chicago P, 2010. Print.

Muller, René J. “Failing Narcissistic Defenses Can Turn Love Toxic.” *The Humanistic Psychologist* 39.4 (2011): 375-378.

Nasi, Irene. “*Revolutionary Road*: A Crack in the Mirror. Analysis of Richard Yates's Novel and Its Time.” (2009)

Richard, Yates. *Revolutionary Road*. New York: Vintage, 2007. Print.

Simpson, John ed. *Oxford English Dictionary, 2nd Edition,* Oxford U P, 2009. Print.

Stoppa, Elena. “Happily Ever After... till the Suburbs Do Us Part: *Revolutionary Road, The Hours and The Stepford Wives.*” (2015)

Tuan, Yi-Fu. *Topophilia: A Study of Environmental Perceptions, Attitudes, and Values*. New York: Columbia U P,1974. Print.

Wilson, Sloan, and Jonathan Franzen. *The Man in the Gray Flannel Suit*. Cambridge: Da Capo Press, 2002. Print.

金原由佳『キネマ旬報 2009 年 2 月上旬号』キネマ旬報社、2009 年.

山城雅江「『アメリカン・ドリーム』から見るアメリカ／『夢』の行方」Web. http://www.yomiuri.co.jp/adv/chuo/opinion/20150105.html

日本聖書協会『*聖書: 新共同訳*』日本聖書協会、1992.

渡辺芳敬. “映画都市パリ.” (2015).

【 要　旨 】

フランスの首都パリは、観光都市として、長年絶大な人気を誇っているが、一方で、「パリ症候群」と呼ばれる旅行者、移住者たちの適応障害が問題視されている。この適応障害は、旅行者たちが抱くパリへの過剰な期待が原因となっている。本研究ノートでは、『巴里のアメリカ人』(1951)、『ミッドナイト・イン・パリ』(2001)等、著名なハリウッド映画の中で描かれるパリの都市描写を分析し、人々のパリ幻想がどのように作られてきたのかを文化学的に考察する。

【　資　料　】　京都大学農学研究科　博士学位論文　要旨

コミュニティ・ビジネスの創出から発展のプロセスに関する研究
―農村地域活性化への効果を焦点にして―

Towards Building a Model of Community Business Development
- Case Studies of Rural Revitalization -

小林　康志*

わが国では急速な少子高齢化が進展し、特に農村部では深刻な社会問題である。

また、国や地方自治体の財政悪化により、これまで行政が担うべきとされていた、まちづくり・福祉・教育・環境などの地域課題を行政施策だけで解決することが困難になってきている。本論文はこのような背景の下、地域課題をビジネスの形で解決していくコミュニティ・ビジネス（以下「CB」という。）が農村の地域活性化の有効な手段の一つになりえると考え、CB の創出から発展のプロセスと、地域活性化への効果を検討することを目的とした。そして、①CB の発展プロセスを明らかにする課題（CB に対する共通の理解を構築し、それに基づいて発展段階をモデル化する）、②CB が地域活性化に及ぼす効果を明らかにする課題（CB の事業形態を類型化し、類型別の地域活性化に及ぼす効果を整理する）、③CB において本来は異質な地域貢献と利益確保をすり合わせる課題（③－1、行政と住民が地域政策の課題を共有し CB を展開することで、どのように地域活性化を実現するのか、③－②限界集落で CB を展開することで、どのように地域活性化を実現するのか）を設定して研究を行った。

本論文の内容は以下のように要約される。

１．先行研究から CB に共通する構成要素を抽出し、地域の主体性、非営利性、継続性の３点に集約した。そして、地域の主体性を２つに分離し「自発性」:「主体が自ら地域課題を解決しようと行動すること」、「コミュニティ性」:「地域課題を共有する主体が組織を形成すること」と定義した。「非営利性」は「組織の利益の最大化・分配よりも地域貢献を優先して事業活動を行うこと」と定義した。「継続性」は、「事業を持続的に継続させる経営資源を備えること」と定義した。

そのうえで、先行研究の発展段階をもとに、どの時期に筆者が抽出した構成要素が発現するのかを「仮説的発展段階モデル」として提示し、分析対象（非営利組織が経営するワイナリー）の発展段階と比較し、構成要素を視点とした CB の発展段階モデルを構築した。構築したモデルの概要は、1)「個人レベル」で主体が行動を開始した段階で自発性が発現、2)「社会レベル」で組織が形成された段階でコミュニティ性が発現、3)「経済レベル」で事業活動を開始した段階で非営利性が発現、4)「社会経済統合レベル」で「経済レベル」における社会的評価の高まりによってコミュニティ性が拡大して継続性が発現、の４段階であることを明らかにした。

２．先行研究から地域活性化の概念を「生産面において地域の経済活動が向上すること、生活面にお

*特定非営利保活動法人スタイルワイナリー代表理事

いて地域の社会生活の質が向上することの双方、もしくは少なくともどちらかが実現すること」と整理した。そのうえで 1.と同じ分析対象を組織形態（ボランティア型組織と私企業型組織）と地域課題（生活課題解決型と生産課題解決型）を分類基準として事業形態を 4 つに類型化し、事業形態の類型からみた地域活性化の効果を分析した。その結果、1）ボランティア型組織が生活課題を解決する CB の事業形態は、地域内の限定された需要に財・サービスを提供するのに適しており地域の社会・生活的な活性化に効果があること、2）私企業型の組織が生産課題を解決する CB の事業形態は、地域に存在する資源を活用し地域の内外に財・サービスを提供するのに適しており地域の経済的な活性化に効果があることを指摘した。よって、CB の経済活動は、その事業形態によって地域活性化における社会・生活的な効果と経済的効果の双方に資することを明らかにした。

３．CB において地域貢献と利益確保をすり合わせる課題（行政と住民が地域政策の課題を共有し CB を展開することで、どのようにして地域活性化を実現するのか）に関しては、三重県伊賀市の菜の花プロジェクト（以下「プロジェクト」という）とプロジェクトに参画する CB の事業主体を事例に分析し、当初はボランティア的組織が生活課題を解決しようとする事業形態であったが、ボランティア型組織が、地域に存在する資源（ナタネ）を、新たな財・サービス（ナタネ油）に活用して広域的に提供する、生産課題解決型の事業形態に変容することで地域貢献と利益確保をすり合わせていることを指摘した。また、事業形態を変容させることで、社会・生活的な効果と経済的な効果を双方発揮していること、行政が多様な事業主体間における互酬関係の構築と調整に配慮することで政策課題と地域課題が地域政策の課題として融合し、地域貢献と利益確保のすり合わせが可能となり、多様な事業主体と共存する形で CB が展開されることを明らかにした。

４．CB において地域貢献と利益確保をすり合わせる課題（限界集落で CB を展開することで、どのようにして地域活性化を実現するのか）に関しては、1）三重県伊賀市の「ふるさとづくり上高尾の会」（以下「上高尾の会」という）の米販売と藁灰コンニャク作りを事例に、都市農村交流活動を盛んに行うほど農村集落のコミュニケーションの質と量を向上させるという生活課題と、主要農産物である米（上高尾源流米）の販売という生産課題を同時に解決していること、2）藁灰コンニャク作りでは、外面的事業形態は経済的な効果を発揮する CB であるものの、内面的な事業の性格は社会・生活的な効果を発揮する CB であり、外面的な事業形態と内面的な事業性格を並存させることで地域貢献と利益確保のすり合わせを可能にしていることを指摘した。また、上高尾の会の都市農村交流事業は、地域に住む誇りといった精神面での効用を高める活動であり、地域活性化への効果は、社会・生活的な効果であったが、CB を創出し発展させることで、地域にある資源を新たな財・サービスとして広域的に提供することが可能になり、経済的な効果を発揮する潜在力を獲得していることを明らかにした。

５．本来は異質な地域貢献と利益確保をすり合わせることが可能であることを明らかにし、会計情報概念の拡張に関する研究に示唆を与えた。

【Abstract】

Japan has seen a rapidly declining birthrate and a growing aging population, both recognized as serious social problems, especially in rural areas.

In addition, due to the financial deterioration of the national and local governments, solving regional issues such as town planning, welfare, education and the environment via administrative measures alone has become increasingly difficult. This paper proposes that a Community Business (hereafter referred to as "CB") can be an effective means for rural revitalization. I consider the process from the creation of a CB to its development, and the resulting effect on rural revitalization.

My study has revealed the following issues:

(1) the challenge of clarifying the process of CB development (building a common understanding of the CB, and creating a model based on this common understanding).

(2) the challenge of clarifying the effect of CB on rural revitalization (classifying the CB business structure and regulating the effect of the classification on rural revitalization).

(3) the challenge of reconciling the different regional contributions and profits of a CB ((3)-1: How to achieve rural revitalization with the creation of a CB when regional policy issues are shared by government and citizens (3)-2: How to achieve rural revitalization when developing a CB in a marginal village).

一般財団法人　京都大学名誉教授
森下正明研究記念財団

紀要「森下財団紀要」

－投稿規程－

制定　２０１５年8月１６日

１．掲載原稿の原則

（1）掲載原稿は、依頼原稿と投稿原稿に分けられる。

（2）投稿原稿のカテゴリーは、原則として「論文」「論説」「研究ノート」「調査報告」「講演記録」「その他」とし、依頼原稿においては、編集委員会において適当なカテゴリー設定をできる。また、投稿原稿については、上記のカテゴリーでは適応できないと判断できるものについては、執筆者と編集委員会において適切なカテゴリーの設定をできる。

（3）掲載原稿は、日本語、又は英語によるものとする。但し、事前に編集委員会が認めたものはこの限りではない。

（4）依頼原稿は、編集委員会における編集方針のもと編集局より依頼する。

（5）投稿原稿「論文」については、査読に付す。「論文」以外のカテゴリーの投稿原稿については、編集委員会が必要と認める場合は査読に付す。

（6）執筆要領については別途定める。

（7）原稿の掲載について判断は編集委員会で行う。

（8）掲載原稿は、電子化・公開する。

（9）事務局が特約を締結した場合を除いて、掲載原稿の著作権は京都大学名誉教授森下正明研究記念財団に帰属する。但し、執筆者自身は、当該原稿について自由に利用できる。なお、その場合、利用箇所、掲載誌、発行年月等を速やかに事務局に報告しなければならない。

２．投稿の条件

（1）原稿は未発表のものに限る。但し、既掲載であっても編集委員会もそれを認め、現掲載箇所を示した場合はその限りではない。

（2）投稿原稿は、京都大学名誉教授森下正明研究記念財団の構成員又はその指導する大学院生若しくは大学院修了者、及び財団理事の推薦のある者によるものとする。共著の場合は、筆頭著者が当該要件を満たす必要がある。

（3）京都大学名誉教授森下正明研究記念財団の構成員の指導する大学院生又は大学院修了者が投稿する場合、京都大学名誉教授森下正明研究記念財団の構成員たる指導教員の承認を得なければならない。当該指導教員は、その承認を与えるに当たり、本紀要の掲載に耐えられる内容であることを確認しなければならない。

３．投稿原稿の内容

当面、観光に関する研究とする。ただし、編集委員会が認めた場合はこの限りでない。

４．投稿原稿の採否

投稿原稿は、編集委員会が必要と認める場合は査読に付す。査読実施の要領については以下に示す通りである。

（1）査読は、２名で行う。査読者は編集委員会における協議の上、編集局より依頼する。なお、査読者のうち最低１名は京都大学名誉教授森下正明研究記念財団の構成員とし、京都大学名誉教授森下正明研究記念財団の構成員以外のものに査読を依頼す

る場合は、編集委員会は京都大学名誉教授森下正明研究記念財団の趣旨及び査読要領を了解できる者を選任することとし、編集局は査読者に対してその旨周知する。

（2）査読者は、次の点に留意して査読をする。

1）原稿条件に合致しているかどうか

2）誤字、脱字がないかどうか

3）他の文献等からの無断引用、剽窃、出典の不記載など著作権をしていないかどうか

4）執筆要領に反していないかどうか

5）著しく論理性を欠くなど掲載に耐えられないものでないかどうか

6）査読者との見解の相違や新規性のある着眼点であったり、提言、発想等であることにより成熟性が欠けることを理由に、当該原稿を否定したり、新たな展開の可能性の芽を摘んでいないかどうか

（3）査読者は、投稿原稿につき、「掲載」、「修正後掲載」、「改稿後掲載」、「不掲載」の判断を編集局に通知する。また、査読者は「修正後掲載」の場合その箇所を、「改稿後掲載」の場合はその理由及び改稿のための指針、「不掲載」の場合はその理由を付して通知しなければならない。編集局はその結果を執筆者に通知する。なお、「掲載」はそのまま掲載を可能し、「修正後掲載」は、修正個所が修正されているかを編集局で確認の上掲載する。この場合この時点で「掲載」と判断されてものとする。また、「改稿後掲載」については再度査読に付す。

（4）２名の査読者のうち１名が「掲載」と判断した場合は、掲載を認めるものとする。但し、執筆者においては、他の判断の理由を考慮してその範囲において一部改変することを可能とする。

（5）上記にかかわらず「掲載」が認められない場合は、執筆者は編集委員会に異議申し立てをすることができる。但し、京都大学名誉教授森下正明研究記念財団の構成員の指導する大学院生又は大学院修了者が異議申し立てをする場合、京都大学名誉教授森下正明研究記念財団の構成員たる指導教員の承認を得なければならない。

（6）前項の場合、編集委員会は、査読者及び執筆者の主張を考慮して、掲載についての判断を行う。

５．投稿手続き

投稿者は、Microsoft Word（97 より新しいバージョン）、及び PDF 形式の電子データを本財団編集委員会宛に提出する。

６．経費負担

当面、投稿料は徴収しない。ただし、図版の作成し直しや特殊な印刷を必要とする場合、著者に実費を請求する。

７．校正

著者校正を原則とする。必要に応じて編集委員会が校正を行う場合がある。

８．抜刷

抜刷については、希望者は３０部３０００円にて購入できるものとする。それ以上必要な場合は、実費１部につき１００円請求する。

一般財団法人　京都大学名誉教授
森下正明研究記念財団

紀要「森下財団紀要」
－執筆要領－

制定　２０１５年8月１６日

１．原稿の構成と書式

投稿する原稿の執筆に当たっては、原則として Microsoft Word（97 より新しいバージョン）を用いて作成すること。

また、原稿は A4 用紙を用い、表紙・本文・注・参考文献・図表・要旨で構成する。各構成要素の書式は以下のとおりである。

（1）表紙：表題・著者名・所属（原則１つ。ただし編集委員会が認めた場合はこの限りでない）・キーワード（5 つ以内。ただし論文、論説、研究ノートに限る）を日本語と英語で記載する。書評については、キーワードのかわりに対象論文、書籍の書誌情報を原著の言語で記載すること。また、投稿原稿の種別についても明記すること。

（2）本文：日本語の場合、横書きで１頁あたり 40 行×40 字で作成する。外国語の場合はこれに準じた分量で印刷すること。

（3）注：番号順に掲載し、本文中の該当箇所に番号を付すこと。使用しない場合は省略することができる。

（4）参考文献：書籍の場合は「著者名・書名・出版社名・発行年」、論文の場合は「著者名・論文名・雑誌名・巻号・頁・発行年」に関する情報を必ず記載し、アルファベット順に並べて掲載すること。ただし、文献の挙示は著者の採用する方式に準拠するものとする。使用しない場合は省略することができる。

（5）図表：本文中に出てくる順に、注とは別に番号を付与し、本文中の該当箇所にあらかじめ表示するか、該当箇所を指示すること。ただし、図と表の両方を使用する場合は、それぞれで番号を別に付与すること。使用しない場合は省略することができる。

（6）要旨：日本語の場合は 400 字以内、英語の場合はこれに準じた分量とする。なお、論文・論説に限り日本語と英語の両方の要旨を記載するものとする。また、英語での論文・論説については投稿者の了承を得て、編集委員会にて邦訳する。

２．原稿の分量

刷り上がり頁数で、12 頁を上限頁とする。この長さを超えるものでも、編集委員会が必要と認めた場合は、掲載することがある。

［　執筆者一覧　］　　（掲載順）

丸山　政行
一般財団法人京都大学名誉教授森下正明研究記念財団　代表理事

山根　明弘
西南学院大学人間社会学部　准教授

森田　浩司
大阪観光大学観光学部 准教授

Karen Nishioka
Graduate School of Human and Environmental Studies, Kyoto University

小林　康志
特定非営利保活動法人スタイルワイナリー代表理事

［通信欄］

一般財団法人京都大学名誉教授森下正明研究記念財団の紀要『森下財団紀要』は、このたび特別号の特別号に引き続き第３号を発行することができました。継続した発行ができましたことに、ご尽力いただいた皆様に編集委員として感謝いたします。

また、森下正明門下の小野勇一先生の指導を受けた山根明弘先生より寄稿いただき本研究記念財団の淵源をさかのぼる軌跡が垣間見られたことと思えます。

今回は、査読対象の論文１本、研究ノート１本の掲載でしたが、資料として、博士学位論文の要旨を掲載いたしました。今後も、学位論文の要旨を掲載することで、博士号授与者の研究の成果を周知できればと考えております。ご希望があれば随時掲載いたします。

掲載数は、昨年より少なくなっています。次年度は、より多くの掲載を期待します。また、論文、論説、研究ノートになじまない原稿はそれ以外のカテゴリーでの掲載も可能ですのでご相談いただければ幸いです。

本号の発行も財団代表理事である丸山政行氏と編集委員、編集局として活躍していただいた大島知典氏に負うところが大きく、深く感謝いたします。また、個々の名前は挙げられませんが、短い期間で査読をお願いした先生方には、的確なご指導をいただき本号の完成に大きくご尽力いただきました。この場を借りて御礼申し上げます。

本財団は、Euro-Asia Tourism Studies Association（ETASA）や旅行ビジネス研究学会と緊密な関係をもち、これらの学会から得られた成果も本紀要に掲載していきます。次号以降も、皆さまの積極的な投稿を期待しております。（編集委員長　廣岡裕一）

［編集委員］

廣岡 裕一（和歌山大学観光学部）
蘇 哲仁　（輔仁大学）
金 相俊　（近畿大学経営学部）
村上 彩実（京都産業大学全学共通教育ｾﾝﾀｰ）
大島 知典（神戸山手大学現代社会学部）

［編集局］

廣岡 裕一（和歌山大学観光学部）
村上 彩実（京都産業大学全学共通教育ｾﾝﾀｰ）
大島 知典（神戸山手大学現代社会学部）

［事務局］

新谷 和美（森下正明研究記念館）

一般財団法人
京都大学名誉教授森下正明研究記念財団
「森下財団紀要」第３号
（年１回発行）

©Morisita Memorial & Research Foundation

2018 年 3 月 20 日発行
発行人　　丸山 政行
発行所　　一般財団法人
京都大学名誉教授森下正明研究記念財団
〒606-8226
京都市左京区田中飛鳥井町 101 番地
TEL：075-712-0909
http://www.morisita.or.jp/

印刷所　　アールエスプランニング